

心  
の  
か  
け  
は  
し

## 音読でつながった感動

孫が四年生の時、私に国語の教科書を、たびたび音読してくれました。それは、説明文であったり、詩であったり、物語の一節であったり、ジャンルは様々ですが、読んだ回数を、表に押印することになっていました。音読が宿題になっていたので、度を重ねる毎に内容を把握できてくるのでしょうか、気持ちが生に表現され、聞いている私にも、それがよく伝わってくるのです。話題は内容に及び、「たんぽぽのわた毛って、そうやって散っていくのね。」等と私が興味を示すと、得意になって、話ははずみます。

実は、私は黙読が苦手で、読書していても内容がよく把握できない部分に出くわすと、声を出し、節を切って納得しながら読まない、どうも文章の言わんとすることが掴めないのです。ですから、早読みは大の苦手で、ただ文字面をたどるだけになつてしまいます。

書く時も同じです。途中でときどき声を出して読み、読み手に理解してもらえるかどうか等、確かめながら書いています。すると欠点がはつきりわかってくるので、音読はかかせません。

私は、かつての小学校教員時代、六年生の国語の授業で、ひとつの物語の読み取りの学習の締め括りに、その物語を私が朗読しました。読み終わった時、「ああ、僕の読んでいた物語とは別の物語のように聞こえた。よかった！」と思わず声を出した子がいたのです。

決して上手な読み方ではなかったでしょうに、子どもたち自

身で精一杯読んできても汲みとりきれなかった主人公の気持ちや背景が心の中に広がって、物語を全体的にとらえることができ、感動することができたのでしよう。

また、かつての担任だった子たちの集まりに参加した時「先生に読んでもらった『ピルマの竖琴』<sup>たてこ</sup>今でも思い出すよ。」と、私自身が感動の涙をおさえながら読み語った物語が何人も子どもたちの心の隅に、大人になった今でも残っていることに、自分も心を熱くしたものでした。

私も、自分が戦中の子ども時代、担任の先生に「愛の学校」を読んでいただく時の楽しみは、今だに忘れることができせん。

音読を、読み手聞き手が年齢を問わず素直につながれる機会の一つととらえ、機会あるごとに、それぞれの感動を思いの中に受け止めあつていけたらいいなと思いつけています。

上三川町 女性

## ああ玉杯に花受けて

昭和十六年に、小学校を卒業したばかりの少年二百余名は、古河工業日光精銅所の技能者養成工として入所した。養成工は午前中は新しい校舎で工業の勉強をし、午後は工場で仕事を覚えるのである。この十二歳の少年の大多数は親元を離れて会社

の寄宿舎で共同生活をするのであった。私は家の都合で一月ほど遅れて入った。知らない顔ばかり心細さにぼんやりしていると、初めて声をかけてくれたのは隣の室長だった大山である。

数日の後、大山より借りていた小説「ああ玉杯に花受けて」を返しにいくと、「少し散歩でもしないか。」と誘われ、二人で外に出た。二人は大谷川の河原の石の上に腰かけ、男体山を見上げていた。

小説は、孤児のチビ公が叔父の豆腐屋で働きながら、旧制の第一高等学校に合格する話である。この一高と海軍兵学校は受験の難関中の難関と言われていた。

黙って山を見ていた大山は、急に振り向き、「俺は工員で終わるつもりはない。上級学校へいきたいと思っているが、君は……。」と聞いた。私も同じようなことを考えていたので、すぐに賛同し、二人で頑張っつて一緒に勉強することにした。

上級学校に行くには、まず現在の大検のように、専検（専門学校入学資格検定試験）に合格しなければならぬ。合格しなければ、上級学校の入学資格がないのだ。二人はそれから毎夜眠くなると、「チビ公、チビ公。」と呪文じゆもんのように唱えて頑張った。

昭和十七年の新養成工が入所してくると、大山も私も選ばされて、新入生の寄宿舎の班長となった。しかも同じ班だった。それから一層大山との親交が深まっていった。

昭和十八年夏、私はあこがれの予科練を受験した。試験場は栃木中学。午前は身体検査。身長、体重、胸囲の順に計測し、次に肺活量。「五七〇〇」の値に「ホー。」と試験管。次は視

力検査。右〇・八、左〇・七。ああ近視で不合格。

大山は秋に陸軍兵器学校を受験、何と七百二十人の受験者中十三名の合格者の中に入ってしまった。神奈川県の兵器学校に入隊した大山は、電波兵器科に配属になった。同僚は大学や専門学校の出身者ばかり、小学校出は大山一人で苦勞したことを、終戦後話していた。

彼は、戦後東京に出て、電機工事の会社に就職し、勉強を続けて一級の電気技師の試験に合格した。大山と私を結びつけてくれたのは、小説「ああ玉杯に花受けて」のチビ公ではなかったかと思っている。



本は心

那珂川町 男性

図書室は楽しい。夕方のシーンとした図書室の椅子いすに座って、整然と並んだ本の背を眺めると、子どもの頃夢見た世界やあこがれ等、様々な想いが湧きあがってくる。

明智小五郎、ペリー・メイスン、エラーリー・クイーン、アルサーヌ・ルパン、シャーロック・ホームズ、オーギュスト・デュパン。

夜を徹して謎解きをした。

「アラジンと魔法のランプ」「アリババと四十人の盗賊」小学生時代は、イスラム世界の存在は物語の中だけのことと信じていた。

私は現在、小中学生とその保護者を対象に教育相談の仕事をしている。最近、子どもの頃夢中になったこれらの本が、教育相談をするうえで、大きな役割を果たしてくれることに気付いた。

私の相談は、小学校の図書室にやってくる児童との何気ない会話から始まることがある。

「アラジンって誰だか知ってるかい。」

「知ってる。テレビアニメで見たことある。」

「絨毯に乗って空を飛ぶ場面があるんだけど、覚えてる？」

「ランプの精も出てくるんだよね。ぼく、マンガでも読んだ。」

子どもは、自分の興味あるシーンはしっかりと記憶している。

「あのアラジンのお話の本が、これなのよ。私が最初にこの本を読んだ時は、ランプのことがよくわからなかったの。」

ちよつど布を織っていくように、本の話は私と子どもとの心の絡み合いを深くしていく。次には、「学校の怪談」の話になり、それから子どもは、自分の兄や姉の話、父母や友だちのこと、好きなこと、とさまざまな話題が出てきて、いつの間にか教育相談をしている自分に気付かされる。そして、にこにこ可愛らしい子ども表情のかけに、親への思いや願い、日常の小さいトラブル、気付かない劣等感など、意外に複雑な感情があるのを知らされる。

子どもの性格や考え方のパターンを理解するためにも、本の話題は適切な判断の役目を果たすことがある。

ある時、こんなことがあった。小学一年生の女の子が、本のページを開いて私に尋ねた。

「この『いぬがじぶんのしっぽをすきなよりも、もつといっぱい』ってどんなことなの。」

開かれた本の表紙を見ると、アメリカの児童書の作家バーバラ・ジョシーの「かあさん、わたしのことすき？」という絵本である。アラスカのイヌイットの生活の様子の絵が、すばらしい色彩で描かれている。

「とってもいい本を読んだのね。あのね、犬は自分の気持ちをもつぽであらわすの。つまらないときも、うれしいときも、どんなときでも犬の心はしっぽを見るとわかるの。だから犬はしっぽがとても大切で大好きなの。この本のお母さんは、犬がしっぽを好きなよりも、もつともつといっぱい、自分の女の子が好きよって言うてるの。いいお母さんよね。」

私はこのすばらしい絵本を初めて見た。

「私のお母さんも、私のことを大好きだった。」

ああ、すばらしい母がいる、と私は思った。これがきっかけになって、その子といつも絵本の話をする。話を聞いている時は、大人と子どもではなく、絵本の登場人物が好きな同じ心の二人であり、同じ感動をした親しい人間同士である。

本は、様々な心を持って、すばらしい人と人とのつながりを作ってくれる、といつも思うのである。

## 本ってすごい

育子さんとの友情は一冊の本から始まりました。本の内容は今となつてはおぼろげになってしまいました。外国の動物の物語でした。

当時は戦後間もない頃で、学校の図書室には本があるにはあったけれど、表紙がなくなっていたり、めくれ癖がついていたりで、多くの中学生が読んだであろうことがはっきりわかる姿をしていました。それでも本に飢えていた中学生は暗くて狭い図書室に、絶えることなく群がっていました。

育子さんと感動を共有した本は、装丁が比較的しつかりしており、嬉しいことにところどころにさし絵がありました。ほとんどが狼の絵で、どこか哀しげな遠いまなざしをしたさし絵が印象的でした。育子さんとのふとした会話の中でその物語の描写やさし絵のことがこぼれ、夢中で感動を語り合いました。そして一冊のノートに、本を読んだお互いの感想を書き合うようになったのです。ことに動物の愛情の深さには涙してしまいました。ノートには気に入った表現描写なども書き写し、涙ぐんだり大声で笑い合ったりして、想像や空想がふくらんでいったと思います。今思うとほんとうにたわい無い遊びでした。それでも「本ってすごい」ことを中学一年の時に初めて実感しました。

育子さんはたくさん本を読んでいて、それも驚きでした。ノートから気づかされることが多くあり、また心が豊かで感化されることばがずいぶんあったと思います。

今この文章を書いていて、その頃の思いがよみがえり、大切な思い出だったのだと気づかされました。友情が一番の宝物として育まれていたのでしょうか。

教職に就き仕事に没頭の日々がきましたが、時代とともに読みたい本は大体手が届き、読めるようになりました。その中で新聞の連載小説は気軽に読めて楽しみでした。何分とかわからず読めるし、気を持たせる部分で明日へつなげるといふ書き方が巧みで、「作者ってすごい」と思いました。アウシュビッツのことを知ったのもその時です。自分がよく知らずにいた世界が描かれ、胸が塞がる思いで読んだものです。このことを子どもたちにも知らせたいと思い、朝のホームルームのわずかな時間を読んで聞かせました。生徒たちはしんとして聴き入り、驚いているようでした。連絡事項が多くて読めない朝は、明日必ず二日分読むことを約束させられました。二週間ぐらい読んだところで余儀無く中断することになってしまいました。戦争の悲惨さが少しでも子どもたちの胸に響けばと思つたことでした。

その後、一人の生徒が「先生」とやってきました。お母さんから、新聞小説の題名と作者と新聞社を先生に尋ねてくるように頼まれたというのです。私は嬉しくてすぐに教えました。家庭で話題になったというのです。一人の胸にしまっておけなかつた子ども、その話に飛びついてきたお母さん。そしてもっと詳しく知りたくなった……。明るい灯の下での親子の会話が目に浮かびました。

私たちを知らない世界へ、驚きの世界へいざなってくれる本。

ときにはのめり込んで悲しんだり怒ったり、ひとすじの道が開けてきたり、そしてかけがえのない友情が生まれることも。「本の力ってほんとにすごい」と思いました。

高根沢町 藤井 英子

### 本は心のかけし

「アルプスの少女ハイジ」私が初めて出会った本だと記憶している。父方の伯母が持ってきてくれた。小学校入学前だったと思う。ハイジの可愛らしい姿、アルプスの雄大な山並み。何だかとても心がワクワクしたのを覚えている。この一冊が私の心に本を読む楽しみの種を播いてくれたと思う。それから伯母は折に触れて本をプレゼントしてくれた。

小学校に入ってから、学級文庫や図書室の本を読みあさった。私が何年生の頃だったかはつきり覚えていないが、図書室に専任のお姉さんが来た。高学年になり私は図書委員になった。その図書室のお姉さんと本の話をしたり、本の整理の手伝いをするのがとても楽しみだった。卒業間近のある日、このお姉さんが「ちよつと難しいかも知れないけど読んでみない？」と薦めてくれたのが「アンネの日記」だった。当時はやはり難しく読んで読みこなせなかった。でも時々折に触れ思い出す大切な一冊である。

ずっとずーつと後になって分かったのだが、この図書室のお姉さんは、定時制高校に通う生徒さんで、昼間は私たちの学校の図書室で働いていたのだ。私はこのお姉さんのおかげで、とても幸せな小学生時代を過ごすことができた。図書室にこういう常勤の人がいて、ちよつとしたアドバイスをしてくれると子ども読書の幅もずいぶん広がると思う。

大人になり、あこがれの図書館に職を得た。それが縁で読書会にも入れていただいた。

やがて結婚して子どもを授かった。「親のつとめとして読み聞かせは当然でしょ。」と折に触れ、息子には本を読んでやっていたつもりだった。しかし、息子の興味はいつこうに活字に向かない。彼の興味はファミコン、テレビのヒーロー等々ばかりである。少し見る活字といえばマンガ！私のあの読み聞かせは何だったのだろう。「義務感でやっているというのが、息子にも伝わってしまったのかな。」と落ち込む日々が続いていた。

縁あって「語り」の勉強をするようになった。「自分の子どもを本好きにすることができなかつた罪ほろぼしに。」などという思いも少しあって、細々ながら小学校で子どもたちにお話（素話）を聞いてもらっている。お話をきっかけに子どもが本を手にとってくれて、少しでも本好きになってくれるといいなと思う。スーパードなどで会うと「お話のおばさん！」なんて声をかけてくれる子がいる。嬉しいような、こそばゆいような気分になる。

嬉しいことが他にもあった。昨年、所属している読書会で、

直木賞受賞の石田依良著「十四フォーティーン」を読んだ。その同じ時に、もう大学生になっていて息子が、同じ文庫本を抱えて帰省した。「この本おもしろいよ。俺も佃島おれのあたりを自転車で走り回って見たいな。」等々のたまう。へえー、中身ちゃんと読んでいるんじゃない。息子も少しは活字に興味を持つようになったんだ。息子の幼い頃一所懸命本を読んでやっていたのも、まんざら無駄ではなかったんだ、とちよっぴり気を良くしている。

若い頃から仲間に入れていただいているあの読書会は、もう三十年以上も続いている。メンバーもほとんど変わらず、三十三数年みんな一緒に年を重ねてきた。メンバーの全員が私より少し年上なので、今までの私の人生の良きアドバイザーでもあった。文学散歩に出かけたり、お芝居を見たり、本を読む以外にも楽しいことを一緒にいっぱいやって来た。気心も知れていて共通の話題も多い楽しい仲間がいるのは心強い限りである。老人会のようになっても続けていきたいものである。

足利市 女性



### 「夜と霧」とK先生

高校一年の時、担任の若いK先生が生物の授業の中で「夜と霧」の話をしてくれました。それは第二次世界大戦末期の Auschwitz シュビッツ強制収容所における著者フランクの体験から深く人間を考察したものです。ドイツナチズムの下にくり広げられるユダヤ人抹殺計画の惨劇の事実と、そこに生き抜いた著者の精神科医としての分析が紹介されました。私はその悲劇に瞠目し、それが人間なのかという驚きと胸を締め付けられるような重い感情が残りました。

その日帰宅するとまっすぐ本屋に向かい、「夜と霧」を探し出して購入しました。強制収容所の不合理な暴力と飢餓、そして過酷な強制労働の下で死と隣り合わせに生きる究極の状態の中で、人間を見つめる目と心の内面へと深まる思索に引き込まれたことを思い出します。何の強制もなく部屋の中で読書をしている私は「自由」という概念を初めて認識し、新たな世界観が広がったものです。

やがて私も教師になりましたが、恩師であるK先生と勤務校が一緒になることはありませんでした。そして同じ市内に住みながら訪ねることもなく、「夜と霧」の話に衝撃を受けたことを打ち明けることもありませんでした。K先生はすでに泉下におられます。県北のN高校の教頭として在職中に若くして病没されました。

私はこの春、人間ドックで以前から自覚症状のあったある病を指摘され、専門医の診察を受けて薬局に入ると、恩師と同じ

姓の名札を下げた薬剤師が私の差し出す医師の処方箋を受け取りました。そこで医師と同じように症状を問いただすので、もう一度説明しなければならぬ煩わしさに不満を感じました。

その後何度か病院と薬局に通ううちに、もしや恩師のご子息ではないだろうかと思ひ尋ねてみました。

「あのー……もしかして、K先生の息子さんではないでしょうか？」と、初日の気まずい会話を謝るように少し腰を折って尋ねると、

「はい、そうですが。」と、明確な返事が返ってきました。

「先生は私が高校一年の時の担任でして……」などと、口ごもりながら説明すれば、

「そうでしたか。」と、私に向けた彼の笑顔に恩師の面影を見いだしました。

「もうお亡くなりになって何年になりますか？」

「そうですねー……三十年ほどでしょうか。」

近年、年月の流れを早く感じる自分ですが、本当にそのような長い時間が経過したのだろうか戸惑いつつ、彼の手渡す薬を受け取りました。

夏の熱い日差しの中を帰路につき、三十年前という恩師が逝去された昭和の年代を逆算しながら、「そうだ、もう一度あの『夜と霧』をじっくり読み直してみよう。」と思ひ立ちました。

どんな状況の中でも生き抜くという自覚を与えたフランクルの「夜と霧」、それを熱く語って聞かせてくれたK先生は、青春の思い出とともにいつまでも忘れることはありません。

那須塩原市 月江 寛智

## 絆をつよめた文学散歩

「さあ、たくさんお飲み。」

と、古い小さな墓石に井戸水をかけてあげたのは、今から何年前になりましたか。読書会で「海嶺」（三浦綾子著）を読んだ、その舞台である知多半島の小野浦を訪れた時のことです。

嵐にあつて、遭難し漂流を続ける船の中では、飲料水の不足は死活問題でした。喉のかわきに絶えられず掬をよぶつて、夜中に水を盗み飲みした船員が見つかってしまいました。その時の船内の情景を思い浮かべた会員のSさんから、自然に発せられたことばであり、しぐさでした。「そうだよね。あの時は、船員の誰もが、どんなにつらかったことか。誰の体も水を求めていたんだからね。」

「宝順丸の乗組員十四名の詣りの墓」として置かれた古い小さな墓石の前で本を読んだ読書会の十名の気持ちは、一つに結びつきました。「さあ、お飲み。たくさんお飲み。」とひしゃくでくんではかけ、くんではかける会員の目には、涙があふれています。

さあ、お飲み

墓石にはねる清い水

本読む仲間の声やさし

誰かがこんな歌を詠みました。

あの時の一体感は、心地良いもので、会員の絆を確かにしようと思ひます。

他界した仲間、病気を得た仲間、年齢を重ねる度に活動は困



難になっています。それでも会員は課題図書を手集まっています。

次のすばらしい本に出会いたくて、二十数年続いています。

赤松読書会 小山市 尾島 栄

## 読書会と私

上の子が小学一年生の時、PTAで読書会が開催された。私は前から、読んだ本の感想を誰かと語り合いたいと思っていたので、入会することにした。だが、二歳の子を連れていかなければならない。会の皆さんに迷惑をかけるのではないかと申し訳のない気持ちだった。会場へ着くと、何人かの人が私と同じように小さな子ども連れで参加していたので、とても気が楽になった。

読書会では、当番の人が選んだ本を読み、その感想を話し合う。最初は緊張して一言も話せなかったが、回を重ねることに皆さんと打ち解けて話せるようになった。

二十代の時、一冊の水上勉の作品を読んだことがあったが、暗いイメージだけで何を語っているのか理解できなかった。ある日、新聞で、その作品を四十代の主婦が誉めたたえていた。私にはどこが良くて誉めるのか、その気持ちが分からなかった。読書会で、水上勉の作品「山門至福」を読み、その根底に流れる人間愛を見出し、深く感動した。「骨肉の絆」では

物なんてものはいつかなくなるものだから、永く残るのは心しかない」と書いてあった。日頃から物よりも遙かに心を大切に思っている私は、その考え方にとても惹かれた。前に新聞で読んだ主婦の誉めたたえていた気持ちだが、よく分かるようになった。読書会に参加していなかったなら、自分の好きな本しか読まなかったに違いない。

上の子が小学校を卒業した後も、子どもたちを連れて参加していた人たちが、各家を回り番で会場にして会を続けた。本を読むだけではなく、時には親子でうどんを打ったり、十二月にはおもちつきもしたりで、子育てをしながらの会である。紅（くれない）会として手作りの文集も何冊が出した。

あれから二十六年の時が流れた。子どもたちも社会人になり、会の仲間も四人になってしまったが、今でも月に一度集い、一泊の旅をしたりして親睦を深めている。

読書会に参加したことにより、決して読まなかったであろう本を読むことができ、そして私にとってかけがえのない友人たちと出会えた。



岩舟町 女性

## 読書を通して共感した日

「旅」と「読書」の好きな私は、旅先でしかない本を求めて読むのが楽しみです。

春に桜を見る旅をしました。その時買ったのが「生きよ淡墨桜」(桑原恭子作)です。それは枯死寸前、樹齡千四〇〇年の老木を見事に蘇よみがえらせた「樹医」を自称する土佐の前田利行の波乱に富む生涯を描いておりました。

私は、その時、何ともいえぬ感動の心に浸っておりまして。この気持ちを伝えたいという思いが広がり、近所の友人や姉にも薦めました。「とてもよかったです。」とのことば、その後、ふつとこの読後感をお聞きしたいと頭に浮かんだのは、恩師であり、読書家のK先生でした。すぐに奥様を通じて、「きつと共感するものがあると信じます。」とメモをはさんでお渡ししたのを覚えています。その後、返事が届きました。「本」は読書の喜び、心のつながりを生み、その証明をみた気がしました。

すっかり青葉の候となりました。ますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

ところで昨日「きつと共感するものがあると信じます。」と書いて貸して下さった、「生きよ淡墨桜」前田利行の反骨の生涯、今読み終わりました。その性たるや狷介高潔けんかいこうけつ、されど口マンを求めつづけて、九十四歳まで生きたハイカラ医師の栄光と波乱の人生、その生き様に脱帽です。

いつだったか、私はこの「淡墨桜」の所にいったことがあ

りますが、こんな風にして蘇生そせいしたということは知りませんでした。

「はんの死」よき伴侶のはんさんの死には胸が痛みました。雨の六月七日、久しぶりに読書をし、至福のひとつときを過ごしました。

この手紙を読み、「本」は読者に年齢と関係なく、感動と喜びを与えてくれる「宝物」だと感じました。これからも、読後感を語りあえたらと思います。

「淡墨桜よ」春になり再び花を咲かせ、人々に春の喜びと「生き抜く力」を与えて下さい。読書こそ、人間に与えられた特権と信じています。そして、人生を豊かなものにしてくれるものと……。

「この夏はどこに旅しようか?どんな本にめぐりあうか。」心はずませています。

茂木町 関本 ナヲ

## 三回の出会い

最初の出会いについて、私が、本の読み聞かせにたずさわることになったのは、ある高齢者の方から、「子どもたちに本を読んで聞かせてあげたいのですが、どうしたらよいでしょうか?」と相談があったことからでした。この方は、永年看護師

さんをし、全国を歩いてきた九州出身の方で、退職をされてから私の住む地域に来られ、一人暮らしをしていた方です。

私は、たまたまその当時、朗読ボランティアをしていましたので、このような相談を受けたのかと思い、早速事情をお聞きしましたところ、この方の子どもたちに対する思いがすばらしく、「現在のような状況では、子どもたちがだめになってしまふ、小さいことだが、今の子どもたちに『本に対する興味を持たせたい。』』という、やさしい心の持ち主でした。その情熱にほだされ、私は、意思を無にしないためにも、会を立ち上げることとなりました。この人の、子どもたちに対する愛情とやさしい思いに感動すると共に、自分を見つめなおす良いきっかけとなったことが、一回目の出会いでした。

次の出会いは、本の読み聞かせをする仲間たちとの出会いでした。この趣旨に賛同する皆さんにお願いをしましたところ、お断りされた方もいらつしやいましたが、ほとんどの方が快く引き受けてくださいました。いろいろな方がいます。農業、主婦、自営業、元保育士、元教諭、会社員などですが、この人たちとの出会いが、すばらしいものであります。私の人生にとって大いになる勉強ができましたし、いろいろな経験の持ち主の方たちとの交流の中で、教えられることがたくさんありました。当然講習会などをし勉強もするわけですが、やはり多くの皆さんと出会えることは、人間形成の上でも大いに役立つものだと痛切に感じました。多くの人との出会いが、人間社会の生活をしていく上にいかに大切なものが、よくわかったのです。

最後の出会いは、子どもたちです。初めて子どもたちの前に立ち、本を読むという、今までに経験のなかったことを行うわけですから、どのような読み方をしたら良いのかとまどい、不安ばかりでした。しかし、なんとか本を読み終わった時、子どもたちが大きな拍手をしてくれ、「良かった。」といわれた時は、感激でわたしの胸はいっぱいになってしまいました。子どもたちのやさしさに助けられて、このときが終わったような気がします。次回からは心も落ち着き、なんとなく普通の読み聞かせができていたのではないかと、自分では思っております。

子どもたちは、月に二回ですが、この機会を楽しみに待っており、また、目をまん丸に大きく開き、真剣な表情で聞いている姿を見ると、わたしたちが励まされます。時々、お礼のお手紙をいただきますが、わたしたちの活動は、少なからず子どもたちに良い影響を与えているのだらうかと、自負しております。

このように、活動を続けて四年になりますが、子どもたちとの出会いが私の意識を変え、子どもたちも、私に対する意識が変わったような気がします。と申しますのは、私は今の子どもたちが、どんな考えを持ち、どのような生活をしているのかを知りませんでした。そのことを知りえたことと、子どもたちが積極的に私たちに話しかけてくるようになったことでした。

私は、読書を通じて子どもたちとの関わりをもってきましたが、地域の皆さんが、何らかの形で子どもたちと関わるのが、これからの子どもたちを健全に育成して上で、必要なことではないかと思えます。

## 「虹の会」の活動を通して

「静和地区にも読書グループを」との岩舟町役場からの問いかけに、当時の静和小学校PTAとその先輩の十名あまりが集まり、「読書会・虹の会」をつくったのは昭和五十四年のことです。

地元の公民館に月一回集まり、毎回二〜三時間、課題図書や自分たちで選んだ本の感想を話し合ったり、次回読む本の希望を出し合うなどして活動が始まりました。その中では、先輩たちの生活の知恵、子どもの教育話なども聞くことができ、その日の来るのがとても楽しみでした。また、二〜三年ごとに手作りの感想文の文集を発行し、これらを読み返す度に当時のことが懐かしく蘇り、今では私のかけがえのない宝物の一つとなっています。

平成になってからは、何人かの新人も入会し、町から朗読の勉強をする機会をいただきました。生まれ育った栃木弁は自分でも気が付かず、何回も直させられたけれども、何とかやり遂げることができたと思います。そして、町からは、広報誌や議会だよりなどをテープに録音し、視覚障害者の方々に提供するポランテニア活動の依頼を受け、新たな活動が始まりました。

それぞれの会員がラジカセを用意し、真剣に練習したことを、今では懐かしく思い出します。その後、先輩からの勧めで、日本財団に録音機器を購入する援助を申請し、運良く認められ、便利で立派な機材で録音テープを作成することができるようになりました。

そのころ、町文化会館の館長をはじめとする先輩から、木村光一氏作の「この子たちの夏」に取り組むよう勧められ、会員皆で練習に励みました。夏の季節になり、町内の小学校等に出向いて、高学年の児童や父兄の前で朗読会を開催しました。後に子どもたちからは「平和な世の中が幸せであること」や「戦争は絶対にしてはいけない」等の感想が添えられたお礼の手紙をいただきました。

現在も、月に一度先生の指導を受けながら、三年前からは、町内の二つの小学校に出向き、絵本の読み聞かせポランテニアも行っております。学校の帰りには、毎回子どもたちから元気のパワーをもらっているような気がします。

活動が始まってから三十年近く経過し、目も衰えつつありますが、今後とも、前向きな気持ちをもって頑張つて活動していきたいと思えます。私にとって、虹の会の活動とその仲間たちは元気の源でもあります。

岩舟町 女性

## 楽しい読書会

「子どもを大切にする社会は、同時に老人が大切にされる社会である。」とボーボワールは言っている。当時、椋鳩十の「母

と子の二十分間読書」は鹿児島を起点に始められた。私は、児童館の支援団体・母親クラブを運営していたので、会員二百五十名にこのことを働きかけ、運動の主眼とした。

児童文化は個々のものではなく総合したものである。初期的な絵本は身近なものでなければならぬ。二、三歳になると言葉を感じる。胎教というものもある。お母さんの読んでいるものを、覚える親自身の声で読む。会員の家庭は現在も、二十分間読書を続けている。

夏休みには、子ども会育成会と協力、図書室から児童書を借り受け、各戸に配布した。一人でも多くの子どもたちに本との親しみを。図書の貸し出しの行われていない郊外の小学校に、県立図書館より児童書を借り受け、貸し出しボランティアを校庭で行った。現在は市立図書館より学校に本を提供。平等の文化を共有している。

この世は受けと払いから成り立つ。YBCの読書運動。百以上を超える読書会の存在。この会から生まれた、朗読ボランティア、朗読の要点、聞きやすさ。素直な発音、正確さ。個々にも読解力につながる。原本に記載されている文字は、原則的にすべて読み取る。朗読は常に自己の知性と教養を高める。この音訳奉仕を始めて思うことは、学校における「読み」の学習は、やったのだろうかということだ。

先頃、県立盲学校の依頼により「おとぎ話」の音訳奉仕に取り組んでいる。私たちも忘れていた「昔話」に酔いしれた。

読書会の水先案内人である県。市図書館の熱意により、気の遠くなるような三十年の歳月をここにクリアした。本を読み、

語り合おうとする仲間たちは、読むという行為の基本を大切にしてきた。テキストの読みをいかに深めていくかを原点とするか否かで、その在り方がずいぶん異なるだろう。増田れい子著「母住井すゑ」を読み、私たちは、牛久沼を訪ねた。かつて志賀直哉が住み白樺派の作家たちが往来した我孫子市手賀沼のほとりにも。著者を身近に感じ、テキストの読みの深まりを促すことにもなる。

望むことはこの国の永遠の平和と、外国のように、老人ホームにも図書館を造って欲しい。

高いところから低いところではなく、共存の世界。手間、暇、惜しまず生きていきたい。

下野市 大山兼子

